

博報堂生活総合研究所 日本型成熟モデルを考えるシリーズ [第1回]
生活動力 2011

「動の成熟」

- 落ち込んでいた人々の生活気分が、2010年について下げ止まり、身の回りの楽しさも、いやなこと・腹のたつことを初めて逆転。
- 現状と冷静に向き合いながら、暮らしに楽しさを見いだす、人々の主体的かつ動的な行為が「動の成熟」という新しい生活像を生み出す。

博報堂生活総合研究所では毎年、年末から年初にかけ「生活動力」と名付けた未来予測を発表しています。最新刊「生活動力2011」のタイトルは、『動の成熟～楽しさ先進国をめざして～』。

バブル崩壊後、マクロ環境の重圧は、日本から世界、経済から生活全般へと常に深刻化し、人々の気分をずっと落ち込ませ続けていました。しかし2010年の今年、その落ち込みがようやく止まりました。楽観的でも悲観的でもなく冷静に現状を捉えながら、能動的に生活を変革させる。身の回りの暮らしから自ら楽しみを見いだすなど、主体的かつ動的な生活者の行為が、新しい生活像「動の成熟」を生み出していると捉えました。

以下、この「動の成熟」を生み出した背景と原動力、その方向性についてご報告します。

(以下、データは、博報堂生活総合研究所「生活定点」調査)

① 動の成熟の背景

経済から生活全般へ拡大する多種多様なマクロ不安により落ち込み続けていた生活者の気分が、ついに下げ止まりました。

日本人の方向：悪い方向に向かっている	2008年 65.4%	→	2010年 57.9%	7.5pt 減 ↘
世の行く末：悪くなる	2008年 55.2%	→	2010年 45.8%	9.4pt 減 ↘
今後の暮らし向き：悪くなっていく	2008年 28.3%	→	2010年 23.2%	5.1pt 減 ↘

② 動の成熟の原動力

人々の能動的な生活変革が、動の成熟を生み出す原動力となっています。

1. 「ニッポン温故知新」…………… これまでの習慣や知識、行動様式など、日本の資産を見直す力
2. 「理系生活」…………… モノやサービス、システムなど各々が自在に先端技術を活かす力
3. 「ソーシャリング」…………… 一人ひとりが主体的に人と関わりあい、社会と繋がる力

③ 動の成熟の方向性

「身の回りに楽しいことが多い」が「身の回りにいやなこと・腹のたつことが多い」を初めて逆転。

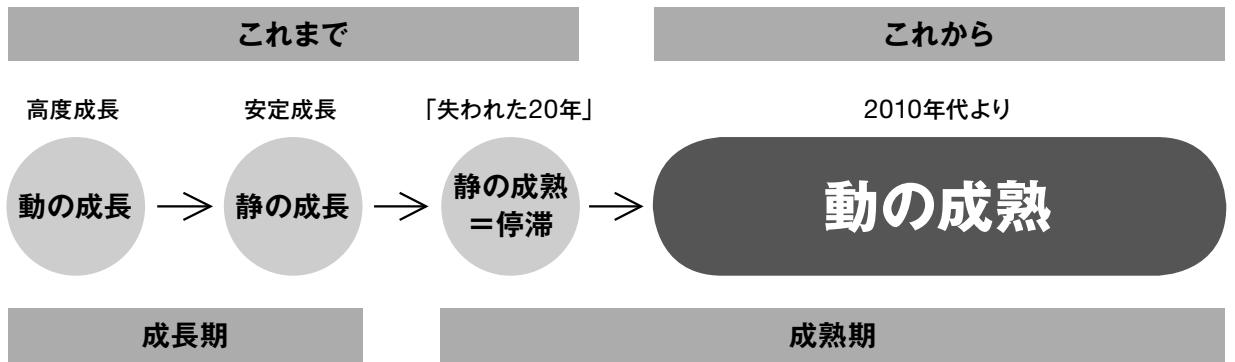
人々は主体的に暮らしの中に楽しさを見いだしています。

身の回りに楽しいことが多い	2008年 37.5%	→	2010年 39.6%	2.1pt 増 ↗
身の回りにいやなこと・腹のたつことが多い	2008年 43.4%	→	2010年 39.2%	4.2pt 減 ↘

※生活者が思い描く日本やその未来像から考える「日本型成熟モデル」についてのニュースリリースは、今後もシリーズで発表していきます。

本件に関する お問合せ先	株式会社博報堂 博報堂生活総合研究所	吉川・夏山	TEL：03-6441-6450
	株式会社博報堂 広報室	西尾・山野	TEL：03-6441-6161

動の成熟とは



行動様式

受動的で一様
萎縮気味(特に失われた20年)

→

主体的で多様
動的(気軽に大胆に)

幸福観

「何をどれだけ持っているか」
蓄積した量が問われる
獲得形幸福

→

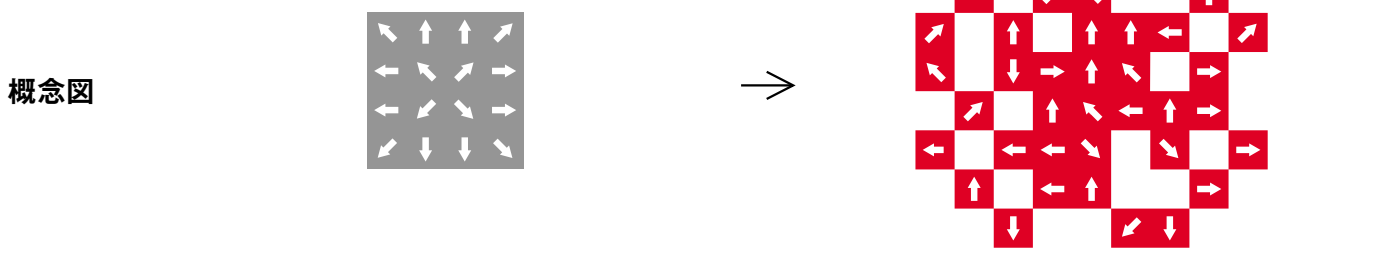
「今、何をどのようにしているか」
行動の質が問われる
進行形幸福

生活像

モノ・サービスを受動的に
享受し暮らしを広げる
拡張型

→

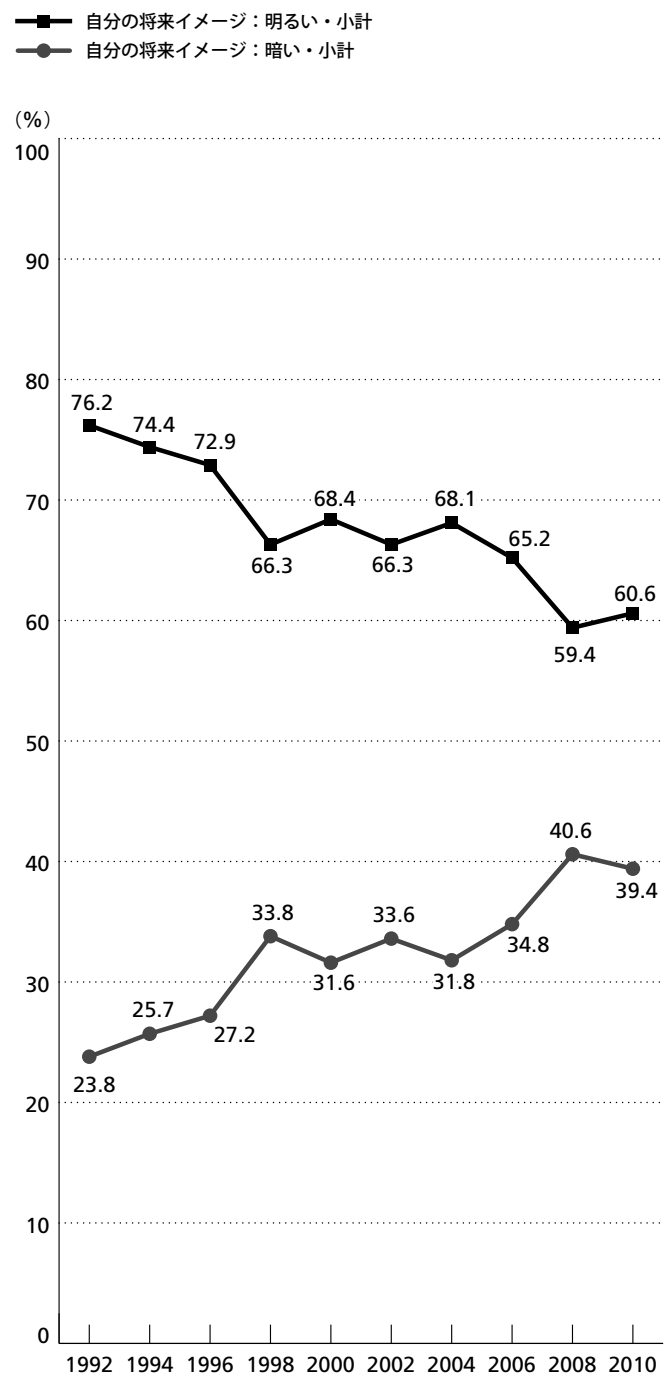
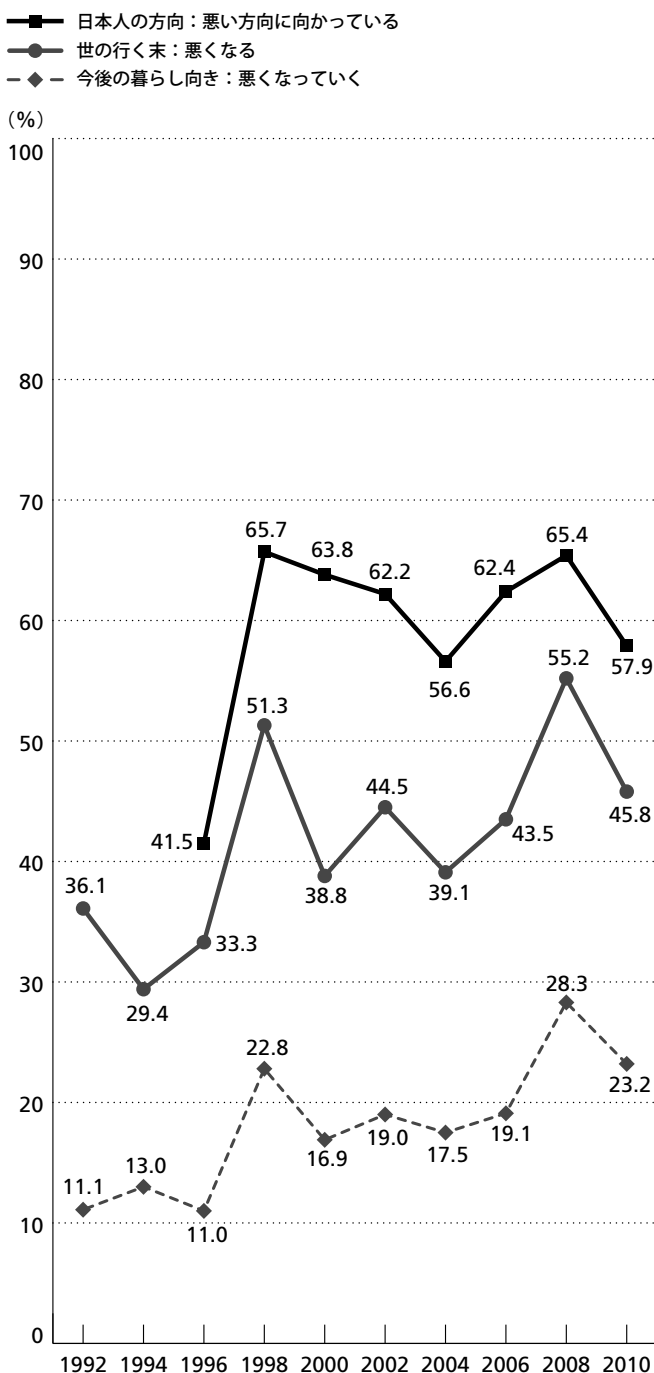
主体的な動きで生まれた
楽しさで生活の質を深める
発酵型



① 動の成熟の背景

経済から生活全般へ拡大する多種多様なマクロ不安により
 落ち込み続けていた生活者の気分が、ついに下げ止まりました。

- 日本の行く末に関して「悪くなる」という回答を見ると、「日本人の方向」「世の行く末」「今後の暮らし向き」のいずれも、1998年と2008年に2つのピークを作っています。
- 最初のピーク前には、1997年の消費税アップ、1998年の大手金融機関の相次ぐ破綻など、日本の家計や経済に関わる出来事が次々と起こりました。
- 2つめのピークを迎える前の2007年にはサブプライムローン問題、食品偽装事件などが発覚。2008年に入ってから、通り魔事件、原油高騰による食品や生活用品の値上げなどが相次ぎました。
- しかし、2008年から2010年にかけて、「悪くなる」が大きく減少、気分の落ち込みに歯止めがかかりました。
- 長らく減り続けていた「自分の将来イメージ：明るい」も同様に、ついに下げ止まりました。



② 動の成熟の原動力

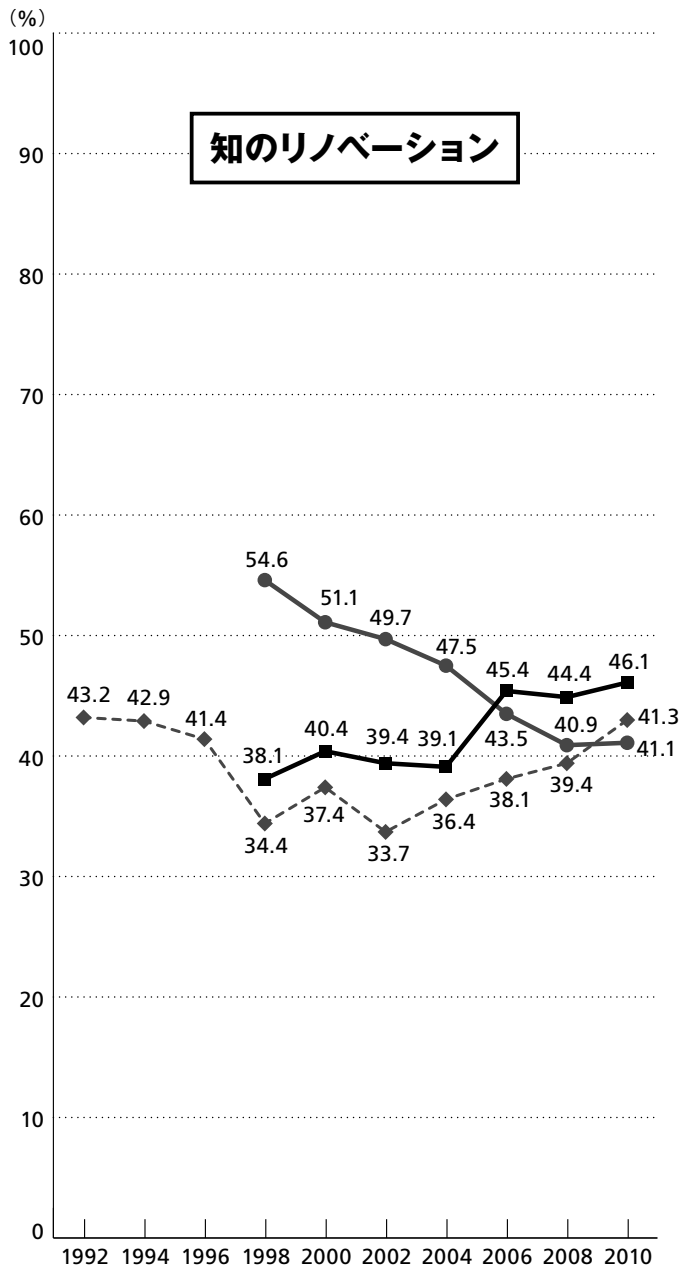
人々の能動的な生活変革が、動の成熟を生み出す原動力となっています。

1. 「ニッポン温故知新」～日本の資産を見直す力～

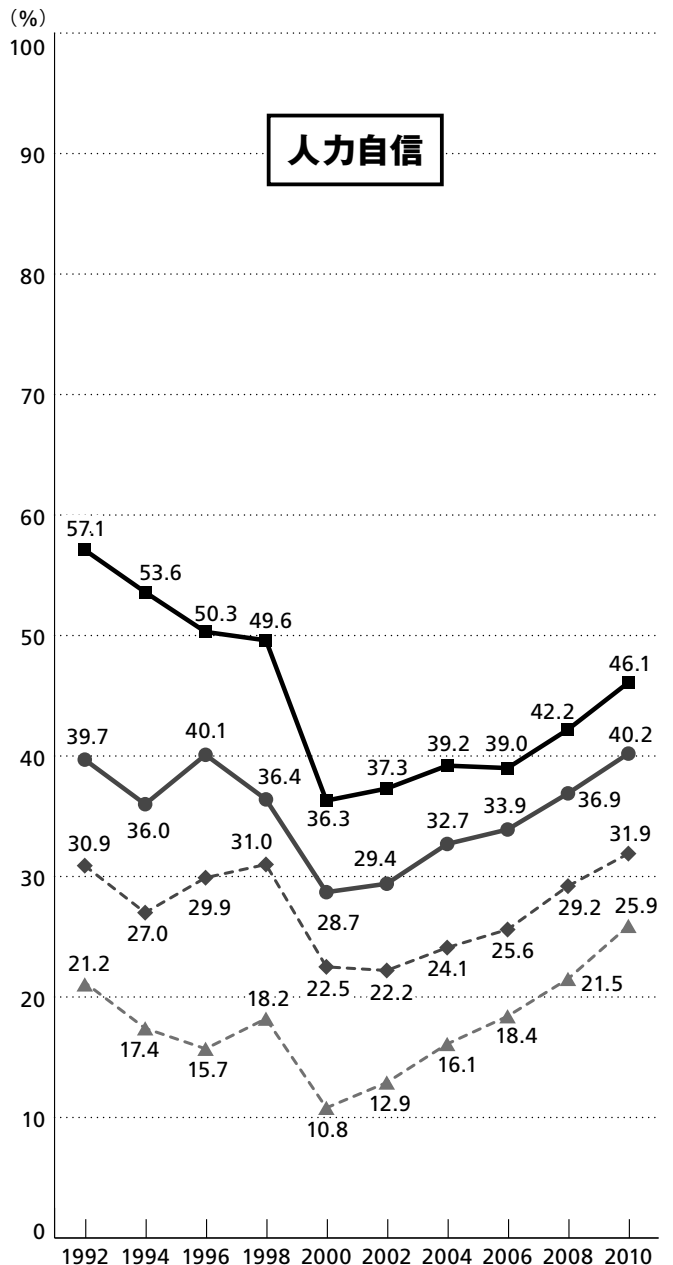
習慣や知識、行動様式など、日本の資産を自分なりに再編して、積極的に活用しています。

- 「習慣やしきたりに従うのは当然だと思う」人は50%に迫る勢いで伸びる一方、「学校の知識は社会で役立たないことが多い」と思う人は減り、むしろ「学歴を信じる」というコツコツ型の学びを支持する人が増加中。
- 「日本の誇れること」では、「国民の勤勉さ・才能」「国民の人情味」「国民の義理がたさ」「質の高いサービス」がいずれもほぼ2002年から上昇。日本人の力の見直しが進んでいます。

- 習慣やしきたりに従うのは当然だと思う
- ◇- 信じるもの：学歴
- 学校で得た知識は社会で役立たないことが多いと思う



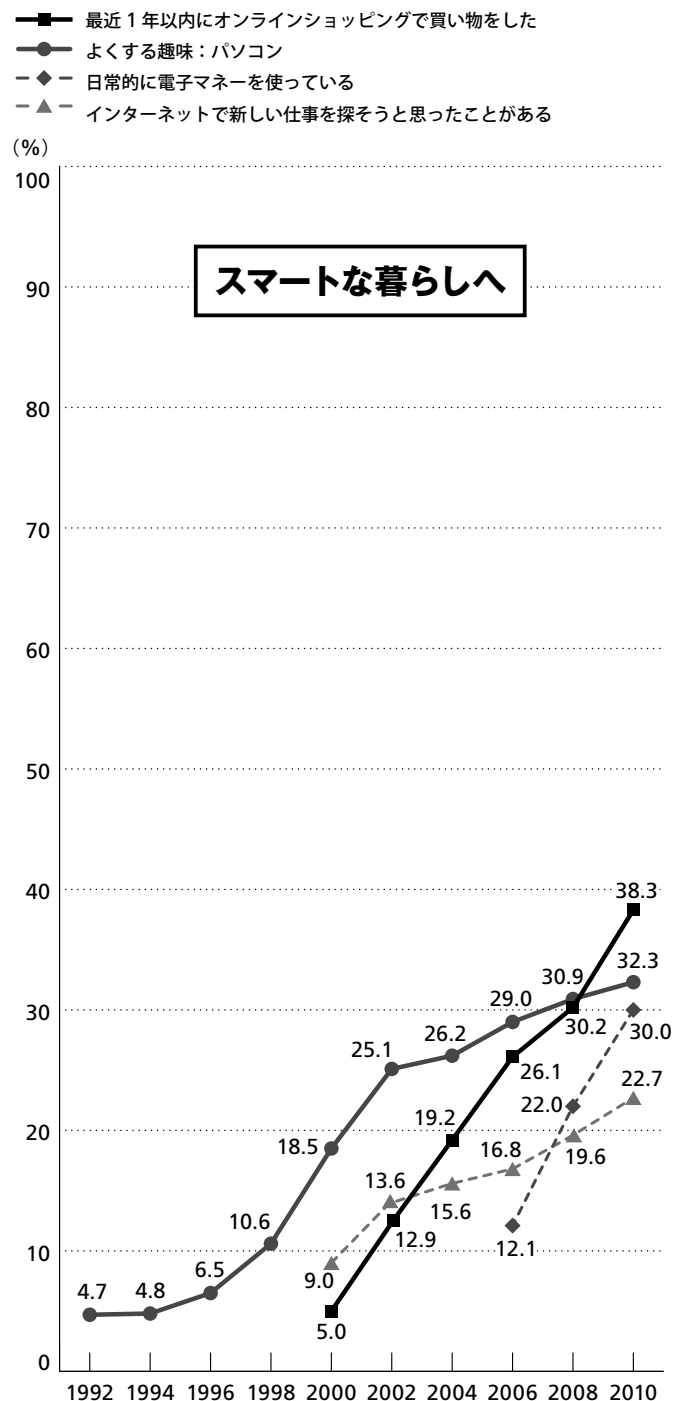
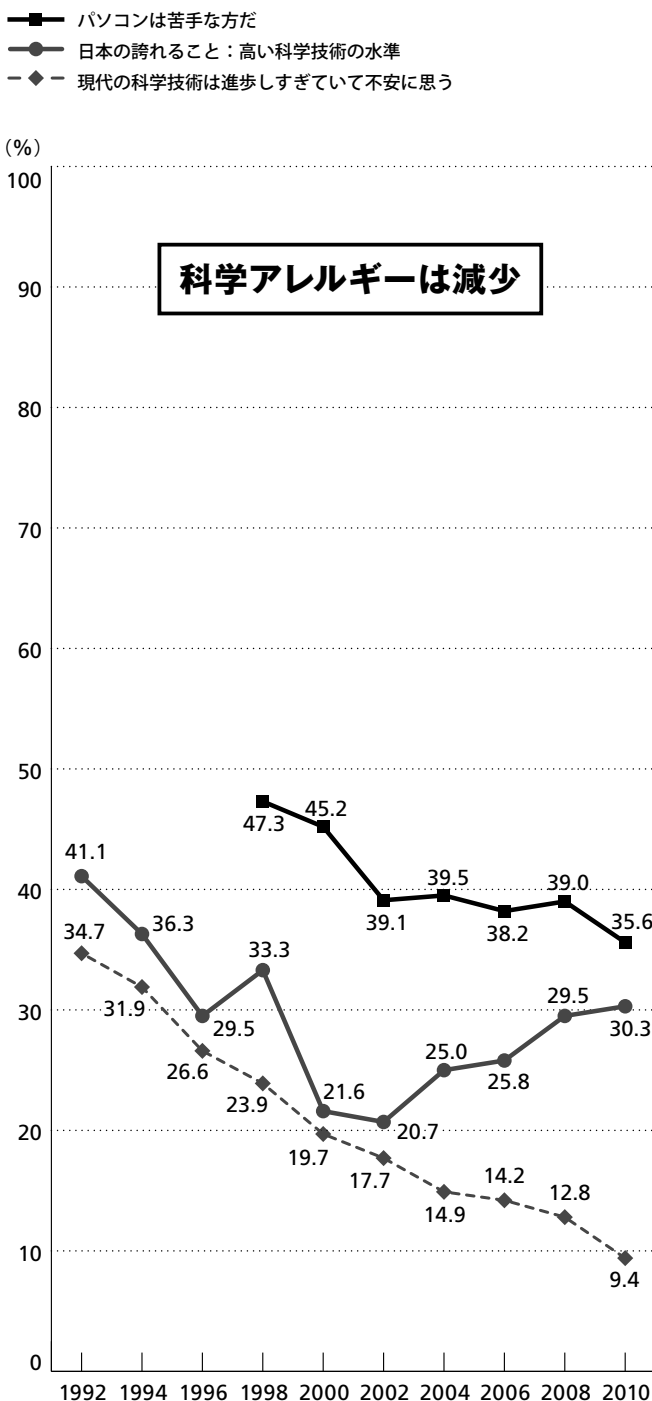
- 日本の誇れること：国民の勤勉さ・才能
- 日本の誇れること：国民の人情味
- ◇- 日本の誇れること：国民の義理がたさ
- ▲- 日本の誇れること：質の高いサービス



2. 「理系生活」～先端技術を活かす力～

技術を活かしたモノやサービス、システムを各々が自在に取り入れ、暮らしを進化させています。

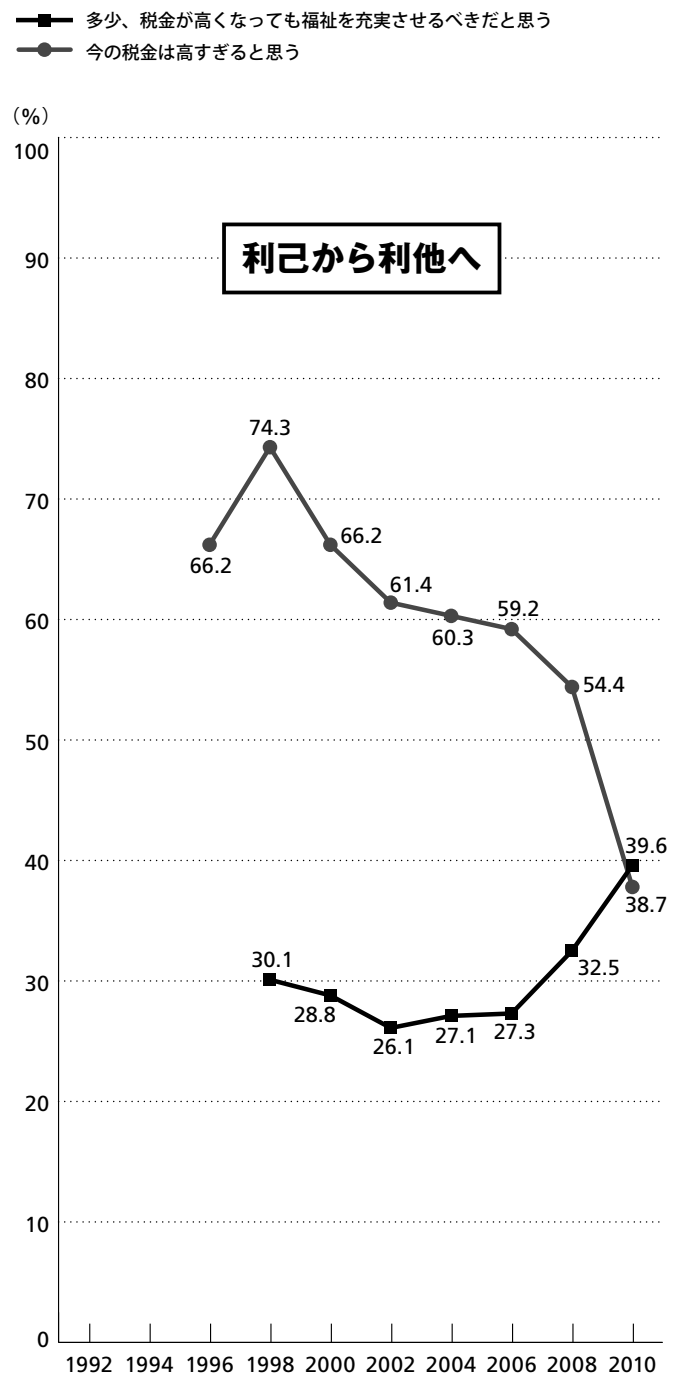
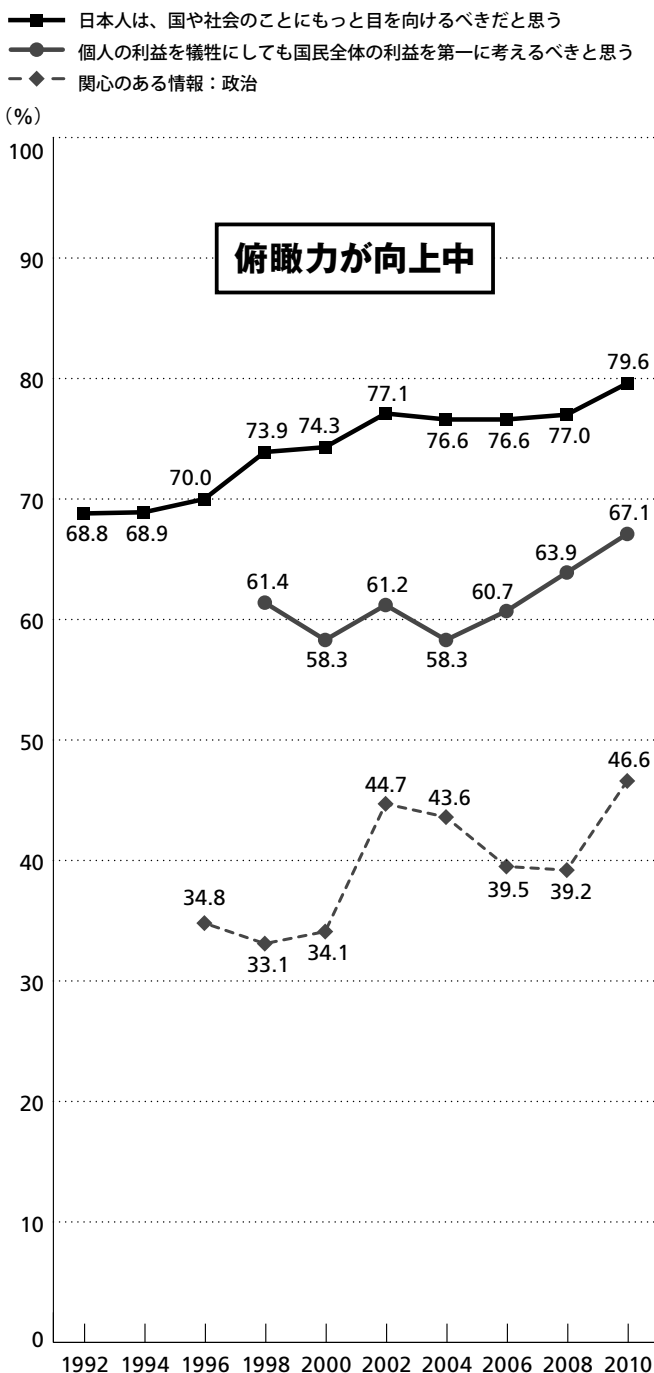
- 日本人の【科学アレルギーは減少】しました。「パソコンは苦手な方だ」という人は減り続け、「現代の科学技術は進歩しすぎていて不安に思う」も、1992年の3人に1人から、2010年には10人に1人に減少。逆に、「高い科学技術の水準を誇れる」という人は2004年以降、増え続けています。
- 社会の電子化で距離や時間の垣根がなくなった結果、生活者は【スマートな暮らしへ】と向かいました。「パソコンが趣味」という人も増えています。「オンラインショッピングで買い物をした」「日常的に電子マネーを使っている」「インターネットで新しい仕事を探そうと思ったことがある」も上昇しています。



3.「ソーシャリング(Social + ing)」～人や社会と繋がる力～

一人ひとりが主体的に動き、人と関わりあうことで、安心できる社会基盤を作ろうとしています。

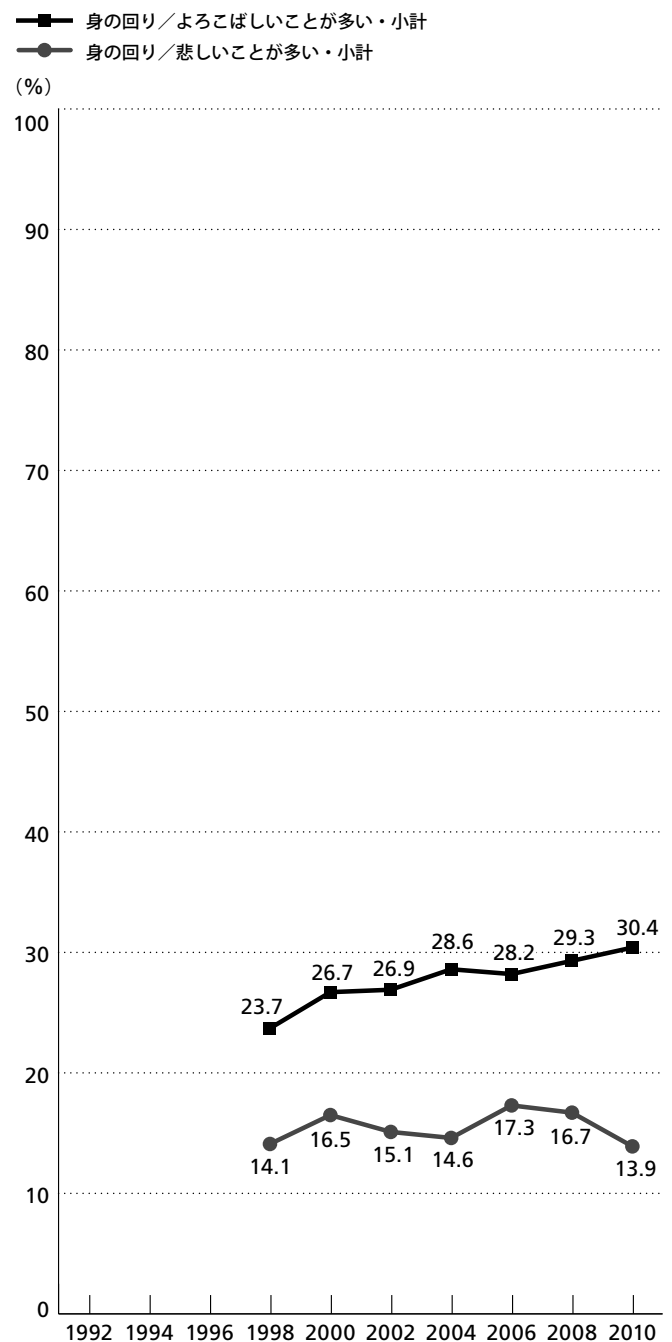
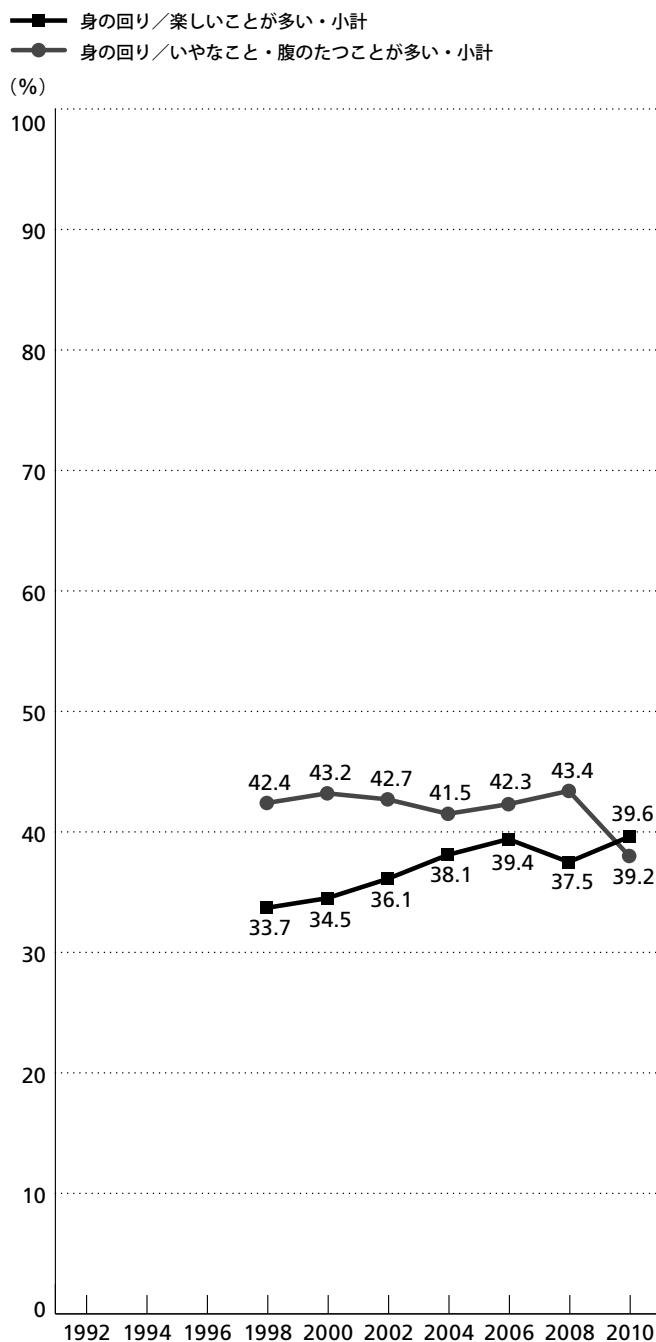
- 個人から社会へと、日本人の【俯瞰力が向上中】です。「日本人は国や社会のことにもっと目を向けるべきだと思う」「個人の利益を犠牲にしても国民利益を第一に考えるべきだと思う」という意見が上昇を続け、いずれも過去最高を記録。「政治情報に関心がある」人も2008年から2010年にかけて急増しています。
- さらに、近年、生活者の意識は【利己から利他へ】向かっているようです。「多少、税金が高くなっても福祉を充実させるべきだと思う」は2004年から上昇し、2010年に初めて「今の税金が高すぎる」を逆転しました。暮らしの基盤を整備するため、一人ひとりの痛みは多少あれども、めいめいができる範囲で社会に投資しようという意識が芽生えています。



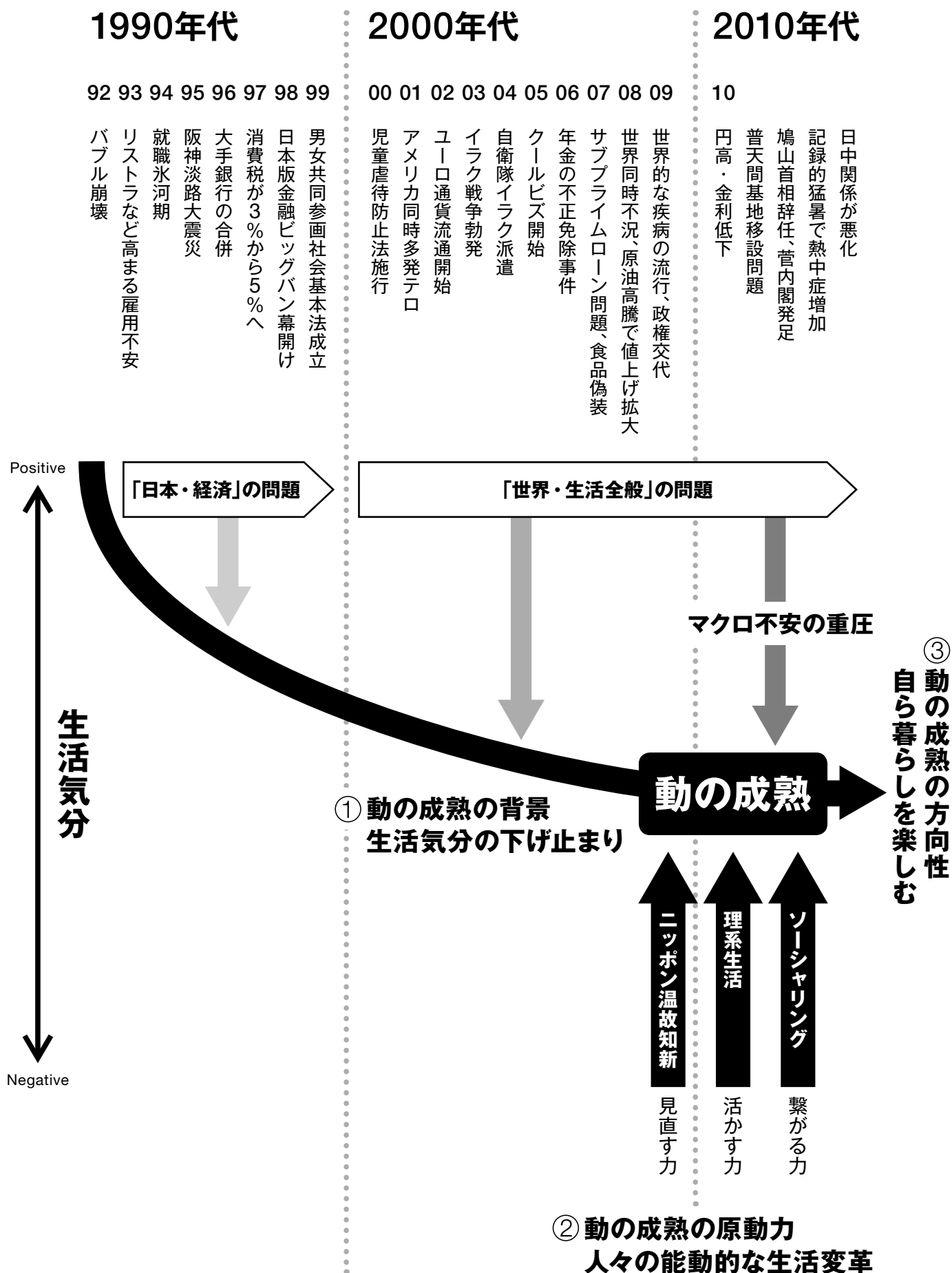
③ 動の成熟の方向性

「身の回りに楽しいことが多い」が「身の回りにいやなこと・腹のたつことが多い」を初めて逆転。人々は主体的に暮らしの中に楽しさを見いだしています。

- 1998年の質問開始以降、身の回りの生活に「いやなこと・腹のたつことが多い」と感じる人の割合は、「楽しいことが多い」と思う割合をずっと上回っていました。しかし、2010年はその関係が逆転。初めて「楽しいことが多い」が「いやなこと・腹のたつことが多い」を抜きました。
- また、「よろこばしいことが多い」もじわじわと上昇を続け、2010年に過去最高を記録。
- 逆に、「悲しいことが多い」は2008年から2010年にかけて減少し、過去最低となっています。
- これまでのように他人から楽しさを与えられるのではなく、各々が創意工夫を凝らして主体的に身の回りの暮らしの中から楽しさを見いだそうとしている、そんな生活者の姿を感じることができます。人々の動的な行為を活性化させるモチベーションは、暮らしを自ら楽しむことの中にあるようです。



[動の成熟] に関する全体概念図



生活定点調査

- **調査概要** 1992年の調査開始から2年に1度、同じ条件の調査地域・調査対象者に対し、同じ質問を繰り返し投げかける時系列調査。その結果から生活者の意識や行動の変化を捉え、将来の価値観や欲求の行方を予測することを目的としています。
- **調査地域** 首都 40 km圏
阪神 30 km圏
- **調査対象者** 20～69歳の男女
- **サンプル数**
(有効回収)

1992年	1,976人
1994年～2002年	2,000人
2004年	3,105人
2006年	3,293人
2008年	3,371人
2010年	3,389人

※ 男女それぞれ5歳刻みを1グループとし、最も少ないグループでも有効回収数が125人となるように最新発表の国勢調査に基づきサンプルの割付を行っています
- **サンプリング** 地点抽出によるエリアサンプリング
※ 該当エリアの町丁目別世帯累積表より、1地点10人前後としたときの地点を等間隔で抽出し、該当地点で対象者を設定しています。
- **調査方法** 訪問留置法
- **調査時期** 偶数年5月
(最新データは2010年5月11日～2010年5月31日)
- **調査項目** 衣、食、住、健康、遊び、学び、働き、家族、恋愛・結婚、交際、贈答、消費・お金、情報、メディア、社会意識、日本の行方、国際化と日本、地球環境など
約1,500項目(2010年時点)。

生活定点URL <http://seikatsusoken.jp/teiten/>

書籍「生活動力2011」発行のご紹介

生活総合研究所は、書籍「生活動力2011」
「動の成熟－楽しさ先進国をめざして－」を発刊します。
「動の成熟」という生活の未来系をご紹介するとともに、
社会に楽しさの生産を実現していくための手掛かりをご提言します。

生活動力2011 動の成熟 楽しさ先進国をめざして

発行日：2010年12月15日

発行所：株式会社博報堂 博報堂生活総合研究所

価格：8,400円(税込)

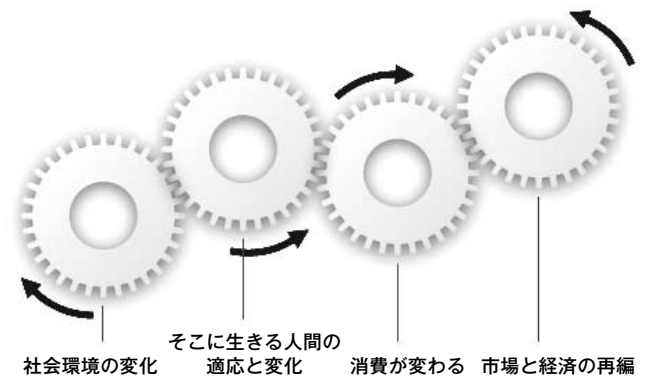
書籍案内およびご購入について <http://seikatsusoken.jp/publication/>



生活者が思い描く日本やその未来像から考える「日本型成熟モデル」についてのニュースリリースは、今後もシリーズで発表していきます。

「生活動力」とは

人口動態や経済の浮沈、技術革新など、様々な時代のインパクトを受け、生活者は常に変化を繰り返していきます。人は社会的インパクトへの適応性と弾力性を持った生き物です。変化する環境の中で、自らの意志と欲求により暮らしを改編していきます。そのことが新たな消費市場を生み出します。生活総研では、こうしたダイナミクスを「生活動力」と呼び、毎年、年初にその発表と提言活動を行っています。



生活動力 2010 態度表明社会 —賛成の連鎖が流れを変える—

様々な課題が人々の暮らしに降りかかり激変する社会環境。企業や政府、自治体だけでなく、生活者にも危機意識が広がる結果、人々は「態度表明」という新しい行動を起こしています。



生活動力 2009 第三の安心 —社会を修理する生活者—

自己防衛という【第一の安心】を経て、家族や地域との関係を固める【第二の安心】へ。そして社会全体の仕組みを立て直す【第三の安心】づくりへと、生活者は動き始めています。



生活動力 2008 手ごたえ経済 —実感をつかまえる幸福へ—

「漂う生活」から「根を張る生活」へ、「楽する生活」から「努力する、身体を使う生活」へ。生活者は生きている《実感》、【手ごたえ】の獲得という幸福に向かって歩き始めています。



生活動力 2007 —世帯が変わる 世界が変わる— 多世帯社会

これからの日本は、世帯総数、1世帯あたり人員、世帯形態の分布など、全てが変化しています。世帯の小口化と多様化は、大きなインパクトとなって生活者に影響をあたえます。